

【用語】仕方―やり方、手段　口授―くじゆ、口伝えに教えをうけること、柿大豆―隠元豆・豌豆・黑豆など蔓性の豆の俗称　はんけ―半夏生、夏至から一日目　田植の真―田植に最も適した時期　土用―ここでは夏の土用のことで、立秋の前一日　こい―肥料、こやしほき過―生育しすぎる

【解説】文化年間頃、群馬郡上野田村(北群馬郡吉岡町)の北端、滝沢川に沿った九分一という所に喜兵衛という篤農家があった。彼は農耕に従事するかたわら、多くの人々をたずね、自らの経験と重ねて最良と思われる農耕技術を探り、それを人々に伝えた。この文書は、上野田村の森田梅園が喜兵衛から口頭で伝授された農法を、子孫のために「耕作の参考書」として一冊の記録に書きとめたものである。

森田家は代々上野田村の名主を務め、上野・武蔵両国の八カ村に知行地をもつ旗本大久保氏の地代官として武家の待遇を受けるようになった家柄で、酒造や質屋なども営む典型的な豪農であった。梅園は学問・文芸の道を究め、門人数百を数えたといわれる風流人であったが、一方では滝沢の用水路を開発し、下流三カ村の田畑を潤した人物としても知られている。なお、この耕作仕方のなかには、「日当たりが良いように、麦の作は東西方向にすること」とや「豆科の緑肥として藤づるを活用すること」など、榛名山東麓のゆるやかな斜面をいかした実践的な農法を説いている。こうした点が学術的にも評価され、この文書の全文が「日本農書全集」第三十九巻に収録されている。